



宇治橋通りには、戦国時代から茶舗屋敷が建ち並び、現在も多くの茶舗屋や茶農家などが、風情のある景観を印象づけています。



7 宇治の街並み

宇治市



栄西の「喫茶養生記」以来、茶は薬として重宝されてきましたが、茶産地のこの地では、町医者が自宅に隣接して茶園を営み、茶葉を産出して、現在もその茶園跡が認められます。この医者は、豊臣秀吉に馬廻りとして仕えた山中又左衛門丞氏清（やまなかまたごえもん の じょうじきよ）で、武士を捨て稲八妻に町医者として居を構え、近年まで代々町医者を営み、屋敷内に累代の墓石を有します。

6 稲八妻医師茶園

相楽郡精華町北稲八間北垣外



8 宇治川

宇治市



奈良時代以前からの水陸交通の要衝。筑紫権子（うじのわきいらつこ）や橘姫の伝承や源氏物語、宇治川合戦、源頼政・頼朝の墓など話題が豊富です。



10 通園茶屋

宇治市



平安時代末期1160年創業の日本最古の茶屋で任官にも登場します。現店舗は1672年築で、江戸時代初期の町屋の様式を残し、「都名所図会（みやこめいしよえ）」にも描かれています。店内には数百年を経た茶樹が並び、一休禅師による初代通園の木像が祀られ、現在も24代当主のお茶を味わうことができます。



11 橋寺放生院

宇治市宇治東内



名水汲み上げの儀を行う宇治橋を管理していた寺。そのことから橋寺と称されます。境内に「木がくれて 茶圃もきくや時鳥」の芭蕉の句碑を残します。



第一章 宇治茶のはじまり (鎌倉時代)

明恵上人は柳屋で育てた茶を宇治の地へ移植させましたが、茶の木を与えられた宇治の里人は、それをどのような間隔で植えたらいのか悩んでいました。すると、明恵上人が馬に乗ったまま畑に乗り入れ、その跡の跡に茶の木を植えるように教えた伝説が記されています。～樹山の尾上の茶の木分け植えてあとぞ生ふべし駒の足影～



1 駒蹄影園跡碑

宇治市五ヶ庄萬福寺跡門前



第二章 宇治茶の確立と初期の景観 (室町時代～戦国時代～江戸時代初期)

3 興聖寺

宇治市宇治山田



宋から帰国した道元が1233年に京都市伏見区深草に曹洞宗の最初の寺院として創建。その後廃絶し、1649年に宇治七名園の一つとして知られた「朝日茶園」の地に再興されました。毎年10月の宇治茶まつりでは、「茶壺口切の儀」や、境内の茶葉（ちゃせん）塚前で「茶壺塚供養の儀」が行われています。



5 白川地区の茶畑

宇治市白川



16世紀、宇治では千利休ら茶人の要望に応え、渋みを抑えた茶葉「碾茶（てんちゃ）」を作る覆下栽培（おおいさげい）により、抹茶が作られました。「白川地区の茶畑」では、現在でも天然の葉を使った本質栽培（ほんずさいばい）や寒冷紗（かんれいしゃ）栽培による覆下茶園群が広がり、同時に玉露（ぎょくろ）も作られています。



2 「奥ノ山」茶園

宇治市宇治善法



15世紀、宇治茶は足利將軍家の評鑑を勝ち取り、「將軍が珍重されている茶」とされ、日本一の茶となりました。「奥ノ山茶園」は、室町幕府3代將軍・足利義満や8代將軍・足利義政が認めた特別の茶園「宇治七名園」の中で、唯一現存している茶園です。



4 茶陶「朝日焼」

宇治市宇治山田



室町時代の七名園の一つ「朝日茶園」の地で、約400年前、小堀遠州より指導を受け「朝日」の印を与えられた名園。約20もの工程を経てつくられる急須には、「おいしくお茶を楽しんでもらいたい」との思いからお茶の味を最大限に引き出すための工夫が詰まっています。併設の陶芸教室ではお茶の器づくりも体験できます。





18 鷲峰山 金胎寺
相楽郡和束町原山鷲峰山

金胎寺は南山城地方の最高峰、鷲峰山(標高682m)にあります。巨岩や奇岩が連なり、大和の大峰山と並ぶ二大霊峰の一つ「北大峰」とも呼ばれ、山岳宗教の聖地として栄えました。7世紀末頃、役行者が寺を開き、聖武天皇が平城京の鬼門を鎮めるために堂を建て勧修寺としたと伝えられています。麓の集落「原山」には山なりの茶園が広がります。



17 原山の茶畑
相楽郡和束町原山

原山は背後に標高682mの鷲峰山(じゅぶさん)が控える集落です。鎌倉時代に、この地に初めて茶の種子をもたらした海住山寺の中興二世の慈心上人により、和束の中でもっとも早くから茶栽培が始まったと言われています。周辺には山なりの閑静な地も広がり、集落内には茶工場も見られます。



第三章

煎茶、玉露の誕生と新しい景観・煎茶 (江戸時代前期～中期)



13 黄檗山 萬福寺
宇治市五ヶ庄五ヶ庄三番瀬

黄檗山の本山で茶葉をお湯にひたしてエキスを飲む「淹茶(えんちゃ)法」を明から伝えた禅僧元澤が開山。建物や仏像の様式、儀式作法から精進料理に至るまで中国風で、日本の一般的な仏教寺院とは異なった景観を有します。三門前に出れば江戸時代後期の俳人・田上菊舎(たがみきくしゃ)の「山門を出れば日本ぞ茶湯み」の句碑があります。



12 海住山寺
木津川市加茂町例幣海住山境外

現在の南山城でもっとも多く茶を生産する和束町の茶は、鎌倉時代に海住山寺にいた高僧・慈心上人が明恵上人から茶の種子を受け取り、鷲峰山の麓の「原山」に栽培したのが始まりといわれています。この寺の五重塔は国宝で、他にも文殊堂や十一面観音立像など重要な文化財も多数有している古刹です。



14 永谷宗円生家
縦喜郡宇治田原町湯屋谷空蔵

元澤が伝えた「淹茶(えんちゃ)法」に着想を得た永谷宗円は、1738年、宇治田原町湯屋谷で新芽の茶葉を蒸し、焙炉(はいろ)の上で手で揉み、乾燥させるという日本固有の宇治製法「青製(おせい)煎茶製法」を編み出し、色・香り・味ともに優れた「煎茶」を誕生させました。日本煎茶の祖である宗円の生家には焙炉跡が当時のまま残されています。近くに「茶宗神社」が鎮座。



15 湯屋谷の茶畑、茶農家、茶問屋の街並み
縦喜郡宇治田原町湯屋谷

江戸時代中期に、江戸で大流行した煎茶。需要の増加に伴い、お茶にまつわる産業が発達しました。湯屋谷は谷深い地でありながら、石垣の上にそそり立つように茶農家や茶問屋が軒を連ねる特異な集落が形成され、今も当時の盛況ぶりを伝える木造3階建ての製茶場が残っています。



16 湯船の茶畑
相楽郡和束町湯船

湯船では主に林業、稲作、茶葉の3つの生業が営まれていました。伝統的な農家住宅や茶工場の建物が残り、当時の茶生産集落の景観が見られます。



第四章

煎茶、玉露の誕生と新しい景観・玉露 (江戸時代後期)



19 流れ橋と両岸上津屋・浜台の「浜茶」
八幡市・城陽市・久御山町

木津川では川を挟んで両岸に茶畑が広がりました。時代劇のロケ地として有名な「流れ橋(上津屋橋)」がある地域は、左岸である八幡市と右岸の城陽市街がともに「上津屋」と呼ばれますが、昔は上津屋村として一つの共同体を形成し、一体となって茶栽培に取り組んできました。両岸は、今も「流れ橋」でつながり、密接な関係が続いています。



21 小倉地区の茶畑
宇治市小倉町

玉露発祥とも言われる地域にあって製茶工場を併設した茶農家に隣接する伝統的な本質(ほんず)による覆下茶園が受け継がれています。棚の骨組みを丸太と竹で組み、その上をよしで編んだ覆簀(よしず)で覆い、茶摘み前に簀を万遍なく張り、側面に藁(こも)を垂らすという、そのほとんどが天然素材で伝統的な技法を伝える唯一の茶園が残っています。



20 飯岡の茶畑
京田辺市飯岡

木津川に隣接する京田辺市の小高い円錐台状の丘陵地「飯岡」には周囲に水田(覆下の稲藁)、裾野に覆下茶園・竹林(覆下の樹立材)、上部に茶農家と垂直に配置され、玉露生産の特徴的な景観が見られます。



宇治茶の近代景観

(幕末～昭和)

22

童仙房の茶畑

相模郡南山城村童仙房



24

田山の茶畑

相模郡南山城村田山



23

高尾の茶畑

相模郡南山城村高尾



25

今山の茶畑

相模郡南山城村北大河原



南山城地域は木津川水運を背景に、幕末から煎茶の輸出が盛んになり、これを契機として茶畑が広がりました。童仙房は標高500mの山奥の平坦地に明治初期に開墾された集落で、水田と山なり茶畑が対をなす素朴な景観が残っています。また、田山と高尾では珍しい縦断の茶畑が斜面に広がる特徴的な景観を残し、昭和44年の高山ダム建設に伴い造成された今山では他の地区では見られない平坦な露地茶畑が広がっています。

26

多賀の「森の茶園」

横濱市手町多賀



多賀地域では、享保年間に奥山新田が開かれましたが、茶葉の需要拡大に応え茶畑を山奥まで広げ、その後の需給関係により茶生産から撤退する農家が出て多くが森に戻りましたが、森の中にあるからこそ良質な茶葉が生産される茶園のみが現在に残り、「森の茶園」となりました。この間に生産に求められた量から質への遷移を物語っています。

27

上粕茶問屋街

木津川市山城町上粕



上粕は木津川水運を利用した交通の要所であり、その地の利から茶問屋が形成されてきました。幕末から明治・大正・昭和初期に建設された茶問屋の建物が現存でも40軒ほど軒を連ね「茶問屋ストリート」とも呼ばれています。平成16年には山城茶業組合創立120周年を記念して山城茶業之碑が建てられました。

28

石寺の茶畑

相模郡和束町石寺



29

白栖の茶畑

相模郡和束町白栖



31

釜塚の茶畑

相模郡和束町釜塚



32

笠置有市の茶畑・索道台跡

相模郡笠置町有市



30

撰原の茶畑

相模郡和束町撰原松ノ尾



和束川を挟んで位置する石寺と撰原の茶畑は、谷底を通る主要道路からは見えませんが、集落を上がっていくと想像もできないような素晴らしい山なり茶園の景観が広がります。釜塚では集落背後の急傾斜の山頂まで茶畑が続く独特の景観を見ることができます。山奥の茶農家などが密集する集落の中に茶工場も点在しています。

深い峡谷状の地形にも関わらず、昭和30年から40年代の最大の茶葉生産拡大期に道路もない山奥・山頂近くに本格的に茶園を拓いたものの、背負い籠での茶葉・肥料運びは困難を極めました。そのため、他の産地では見られない1200mに及ぶ索道を設け、肥料の荷揚げ、茶葉の荷下ろしに活用しました。極度の条件不利地での生産を物語り上で不可欠の資産です。

